

指導資料



鹿児島県総合教育センター

音楽 第35号

- 小学校，特別支援学校対象 -

平成19年10月発行

楽しく音楽にかかわり，豊かに表現する音楽科の学習指導 - つくって表現する活動の展開 -

平成元年に改訂された学習指導要領で，つくって表現する活動が小学校，中学校で取り入れられたことにより，音という素材を通して自分の思いや気持ち，感動体験などを豊かに表現しようとする活動が行われるようになった。平成10年の改訂においても，この項目の内容は発展的に踏襲され，児童の感性や発想を生かした活動の充実を目指して平成14年度には完全実施された。

しかし，指導の道筋が分かりにくいことや時間がかかることなどを理由に，完全実施以降も充実した活動が展開されているとは言い難いものがある。また，この活動に対して，指導者が楽譜として完成させる「作曲」としての学習のイメージを強くもち，作曲のための技術指導に目がいきがちであるということも活動が停滞している一因として考えられる。

折から，平成19年7月の中央教育審議会教育課程部会において音楽科の課題の一つに「創作の学習が不十分である。」ということが指摘されており，これを充実させるために，小学校では「音楽づくり」を行うことの重要性を強調している。

こうした状況を省みて，今後，児童の創造的な活動をより一層重視し，児童が音楽的な

感受に基づき，自ら考え，判断し，自己を表現し，さらに互いの表現を分かち合っていくような学習活動が展開されるよう指導法の改善を図る必要がある。

そこで，本稿では，これらの現状や課題を踏まえ，音楽をつくって表現する活動の事例を通して，豊かに表現する学習指導の工夫改善について述べる。

1 つくって表現する活動とは

つくって表現する活動とは，児童がこれまでの様々な経験を経て培ってきた感性を基に，表現したいという意欲を高め，イメージを豊かに膨らませて，自分にとって価値ある新しいものをつくり出す創造的な学習活動である。と同時に，この活動は，リズム感や旋律感，音色感などを感覚的に養い，美しいものや自然に感動する柔らかな感性を育てるための音楽の基盤となる活動でもある。

「つくる」という営みの中には，無から有を生み出すという活動（音の素材を基にして音楽づくりをする，いわゆる創作活動）だけでなく，表現する過程において自分なりに工夫していく活動（既存の楽曲を

基にして曲想表現を更に工夫する活動)も含まれる。

元来、音楽は学習すること自体が表現活動であり、児童なりの感性を通して、創意を織り込んだ学習はすべて創造的な表現活動といえることができる。言い換えると、単に作曲的な活動ばかりでなく、歌唱や器楽、鑑賞の指導も創造的活動として取り扱うことによって、つくって表現する活動の指導につながる。例えば次のような活動が考えられる。

- ・ 学習した曲を自分のものとしてその曲にふさわしい解釈をして歌うこと。
- ・ 器楽曲をその曲に合うように表現の仕方や楽器の選択などを工夫して演奏すること。
- ・ 音楽を聴いて、スキップや駆け足、ダンスなど自由な身体の動きとして表現すること。

2 つくって表現する活動の利点

この活動の最大の利点は、読譜力や器楽演奏の技能をあまり必要とせず、すべての児童が音楽づくりに楽しく参加することができるという点である。児童は音を聴き、音を探しながら、主体的、創造的に音楽活動に取り組むことができる。

また、つくって表現する過程において、一人一人の児童が自分らしさを表現し、それぞれのよさを認め合いながら音楽をつくる中で、コミュニケーションを図ったり、心を開き、互いの心を交流させることにより、創造の喜びを感じ取ったりすることができる。

3 つくって表現する活動の実際

本実践は、楽曲への思いを抱き、曲想表現を深めていくために、関連教材を効果的に活用しながら、つくって表現する活動に取り組んだ小学校第3学年の実践例である。

- (1) 題材 様子を思い浮かべて表現しよう
- (2) 教材 「うさぎ」(主教材 - 日本古謡)
「月のうさぎ」(関連教材 - 合唱組曲「月と良寛」の第3曲、宮地廓慧作詞、大中恩作曲)

(3) 実際(全4時間)

ア 楽曲との出会いの活動(1時間)

題材のねらいに合った魅力ある教材を準備し、楽曲との出会わせ方を工夫することで楽曲の楽しさや特徴を直感的に感受させる。

〔活動の工夫〕

学習の導入では、児童の側に立った教材との出会いを工夫することが大切である。その際、音楽の楽しさや美しさを感じ取らせ、児童自ら表現したいという内発的な欲求をもつことができるように、児童の感じ方や考え方を生かす次に示すような多様な学習活動を設定する必要がある。

- (ア) 「うさぎ」を聴いたり歌ったりして、曲の感じや月のイメージについて話し合う。その他、次のような活動が考えられる。
 - ・ 題名から曲の感じを想像する。
 - ・ 歌詞を朗読して想像する。
 - ・ 情景画や写真を見て想像する。
- (イ) 「月のうさぎ」を聴き、うさぎが

住むと言われる神秘的な月のイメージについて話し合う。

- ・ なぜうさぎが月に住むようになったのか、物語の概要を理解する。

イ 思いをもつ活動（１時間）

「こんな曲だな。」というイメージを基に、歌詞の内容や音楽的要素に着目させながら「このように歌ってみたい。」、「こんな音楽（物語）をつくりたい。」という思いを抱かせる。

〔活動の工夫〕

自分の表現したい思いやイメージを音づくりに結び付けていくためには、学習の手順を明確にするとともに見通しをもたせることが大切である。また、共通のイメージをもったり、演奏を記録したりするために、右記のような図形楽譜を用いて音や音楽のイメージを自由な発想でえがいていけるようにすることが大切である。

(ア) 「月のうさぎ」の物語を三つの場面に分けて、場面ごとにナレーションを考える。

(イ) 物語のイメージに合う効果音を考え、ナレーションに取り入れる。

- ・ イメージに合う楽器を選ぶ。
- ・ リズムを工夫する。

《１の場面のナレーションと効果音》

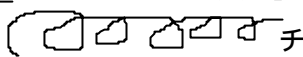
昔々、その昔、きつねとさるとうさぎがおりました。あるとき、お腹がすいて死にそうなおじいさんを助けようと、３匹の動物は食べ物を探しに出かけました。

- お腹がすいて→「大太鼓」でゆっくり叩く。（ドーン、ドーンのリズム）

- 死にそうな→「グロッケン」で言葉に合わせて“ミラララ”の階名で演奏する。（タタタタターンのリズム）

《２の場面のナレーションと効果音》

きつねとさるは、食べ物たくさん見つけました。けれどもうさぎは、何にも持たずに帰ってきました。うさぎは焚火の中に身を投げて、おじいさんに自分の体をささげました。

- 見つけました→「ウッドブロック」で軽やかに演奏する。（タンタンタンタンタンのリズム）
- 身を投げて→「トライアングル」で連打する。（チリリリリーンのイメージ、図形楽譜)

《３の場面のナレーション》

神様の姿に戻ったおじいさんは、うさぎの優しい心を愛でて月の世界へ送りました。

ウ 思いをあたためる活動（１時間）

友達と学び合い、高め合う活動を通して、納得のいくまで自分の表現を追求させ、音楽のイメージを更に膨らませる。

〔活動の工夫〕

曲想表現を工夫する際は、常に歌詞のもつ心に着目させながら、自分の気持ちを表現させていくことが大切である。また、ふし遊びやリズム遊びの活動を豊富に体験させたり、いろいろなリズム・パターンを例示したりして、言葉のリズムや抑揚を生かして短い旋律をつくっていけるようにすることが大切である。

(ア) 場面ごとのストーリーを短い詩にまとめ、ふしづくりをする。

《1の場面の歌詞とふし》



- ・ 児童は、おじいさんを早く喜ばせたい3匹の気持ちを長調のふしで明るく表現した。

- (イ) 前奏づくりや2と3の場面をつなぐ間奏づくりをする。

《1の場面の前奏》



- ・ 児童は、早く食べ物を探しに行きたい3匹のうきうきした気持ちをタンタタタンのリズムでリコーダーを使って軽快に表現した。

《2と3の場面をつなぐ間奏》



- ・ 児童は、自分の体を捧げたうさぎの行動を短調のふしで表し、グロッケンで優しく表現した。

エ 思いを分かち合う活動（1時間）

相互に発表し合ったり鑑賞し合ったりする活動を通して、自他の表現を認め合えるようにするとともに、思いを伝え合う喜びを味わわせる。

- (ア) 場面ごとにミニコンサートを行う。

- ・ 表現の良い点を認め合ったりアドバイスをし合ったりする。

- ・ よさやアドバイスを生かして表現を練り直す。

- (イ) ナレーションや前奏、間奏の組み合わせを工夫し、「うさぎ」を歌う。

《音楽物語「うさぎ」の構成》

前奏→1場面のナレーション→1場面のふし→2場面のナレーション→間奏→3場面のナレーション→「うさぎ」の斉唱→3場面のふし

- ・ 児童は、3の場面のナレーション後に、気持ちをこめて斉唱した。そして、最後に、「うさぎさん、優しい心をありがとう。いつまでもいつまでも見ていてね。」というふしをつくり、「うさぎ」の音楽物語を完成させた。

（日置市立鶴丸小学校 新内良味教諭の実践を基に作成）

本実践では、音の組合せを工夫し、簡単なリズムや旋律をつくる事項に焦点を当てて述べてきた。つくって表現する活動では、特に情景などをイメージ化して扱う場合、音に置き換えやすい要素が含まれているかという視点が大切である。また、つくって表現したものは、個性的で自由な発想に基づく表現であると同時に、それが多くの児童によって共感し合うことのできるものであるかということも大切になってくる。

今後、つくって表現する活動を更に充実させていくためには、児童の音楽的体験活動を把握し、学校や児童の実態に即しながら、全学年を通して継続的、発展的に指導の充実を図っていくことが大切である。

（企画課）